

松下幸之助のグローバル観 —Quest for Prosperity—

本年4月、パナソニックグループは、パナソニック電工、三洋電機の二社を完全子会社化し、新しい体制をスタートさせました。そして、エレクトロニクス NO.1 の「環境革新企業」を目指しています。全世界の社員が松下幸之助のグローバル観の本質を学び、当社を真のグローバル企業へと進化させなければなりません。

松下幸之助は、創業まもない頃から世界に目を開いていました。フォードの伝記を読み大量生産方式を学び、エジソンを師と仰ぎ、電気製品の発明・考案に力をそそぎました。パナソニックのグローバル化は創業の頃より始まっていたのです。

戦後になり、幸之助は、1951年（昭和26）に初めて海外へ渡航し、アメリカとヨーロッパを訪問しました。海外の先進技術や新しい経営手法を学び、次々と導入していきます。経営理念については、当社の方が優れているとの確信を得ました。

60年代に入り、日本の電機メーカーの先陣をきって海外に工場を建設していきます。その国の繁栄を求めて、当社の経営理念と経営基本方針に基づき事業を展開していきます。

1981年（昭和56）1月の経営方針発表会では、「本年は一年間、アメリカ松下電器で勤務する」と宣言し、周囲を驚かせました。86歳になっても海外へのあくなき挑戦はやむことはなかったのです。健康を気遣った経営幹部に止められ、長期駐在はかないませんでした。11月にはニュージャージー、シカゴ、メキシコへと13日間おもむき、車椅子に乗って工場を見学しました。これが最後の海外渡航となりましたが、56歳から86歳まで外国訪問は17回、滞在日数は343日にも及んでいます。

この特別展では、経営理念が海外で継承されていることも紹介しています。松下幸之助とパナソニックの歴史はグローバル化の歴史であると言えます。松下幸之助のグローバル観を学ぶことによって、全世界の社員が共通の理念でつながれ、それぞれの立場で社会の繁栄にさらに貢献していくことになれば幸いです。

松下幸之助 歴史館